

派遣者番号	30J01	氏名	関口 友子
研究主題 —副主題—	小学校外国語活動における英語による指示の効果について		
派遣先	横浜国立大学 大学院	担当教官	満尾 貞行
所属	墨田区立第三寺島小学校	所属長	中村 奈緒美

キーワード：小学校 外国語活動 教授言語

1 研究の背景 (目的)・主題設定の理由等

2020 年度より、小学校の第 3・4 学年において年間 35 時間の外国語活動、第 5・6 学年において年間 70 時間の外国語科が導入される。小学校において外国語を指導する時数が増えることとなり、担任による指導も増えることが予想される。

外国語活動や外国語科が、他の教科と違う点は、「教授言語」を考える必要があることである。「教授言語」とは、岩中 et al. (2015)では、「外国語の授業において使用される言語のこと」と定義されている。小学校の外国語活動に関して、伊藤(2017)では、「小学校で英語を多く使用した授業を実施した際、理解が半分未満である児童が 6 割近くいること」、Mills(2014)では、「日本の小学校の外国語活動では指示を与える目的で、日本語が使用されていること」が分かった。

以上の点を踏まえ、本研究では、活動の指示や説明を行う際に用いる教授言語 (英語・日本語) によって、児童の理解や発話に違いが生じるのかを明らかにすることを目的とし、次の 2 つのリサーチクエッションを設定した。

- ① 指示をする際、教授言語を変えることで、小学生の理解や発話に違いは生じるのか
- ② 小学生は何語での指示を好むのか

2 研究の内容・研究の方法

(1) 対象と調査期間

Study I : 都内公立小学校 3～5 年生 137 名
(2018 年 11 月～2019 年 2 月)

Study II: 都内公立小学校 3～5 年生 142 名
(2019 年 9 月～2019 年 11 月)

(2) 手順

各学年において、指示をする言語を変えた外国語活動の授業を 2 回実施した。各授業をビデオで撮影すると同時に、各クラスの 1/3 に当たる児童に IC レコーダーを装着してもらい、音声

データも記録した。また、授業後には児童への意識調査を実施した。活動内容や習熟度の影響を排除するために、次のように教授言語を変え、授業を実施した。

1 時間目	1 組：英語	2 組：日本語
2 時間目	1 組：日本語	2 組：英語

(3) データ分析

① 児童の発話分析

IC レコーダーの音声データは、活動の指示後 1 分間の対話をトランスクリプトに書き起こし、会話のパターン、活動開始までの時間を分析した。

② 児童の質問紙調査の分析

児童の質問紙については、統計処理ツールを用いて統計処理を行った。

3 研究の結果

(1) 指示の理解について

中学年では、英語での指示よりも日本語での指示の方が理解できていた。対応のある t 検定 (同じ児童を対象に、教授言語を変えることで指示の理解に差があるのか) の結果は、Study I・Study II の両方で、中学年では有意差が見られた。5 年生については、Study I では有意差が見られたが、Study II では有意差は見られなかった。

(2) 指示言語による発話パターンについて

A: 活動集中、B: 活動傾向、C: 説明、D: 表現未定着、E: 無活動の 5 つの発話パターンが明らかになった。中学年では、日本語で指示をした際、英語指示の時よりも C: 説明が減り、A: 活動集中と B: 活動傾向が増えていた。また、中学年では、活動を開始するまでの時間も日本語で指示した方が、英語で指示した時よりも有意に速かった。この有意差は、Study I と Study II の 3 年生、Study II の 4 年生に見られた。

(3) 教授言語の好みについて

指示に用いる教授言語の好みについて、対応のある t 検定 (同じ児童において、日本語指示を好む度合いと英語指示を好む度合いに差があるのか) を行った結果、Study I と Study II では違いが見られた。Study I では、3・4年生は日本語指示を好み、5年生は英語指示を好んでいて、発達による違いが見られたが、どの学年でも統計的な有意差は見られなかった。Study II では、学年により好みの違いが見られた。3年生は英語指示、4年生と5年生は日本語指示を好み、3年生と4年生では統計的な有意差も見られた。

(4) 教授言語の好みと英語に対する意識について

教授言語の好みと英語に対する気持ち (英語が好き・英語が得意) の間の相関関係を調べると、Study I でも Study II でも、英語指示を好むことと英語に対する前向きな気持ち (好きである・得意である) には正の相関関係が見られた。一方、日本語指示を好むことと英語に対する前向きな気持ちとの間には、負の相関関係が見られた。

【Table 1 英語指示を好むことと英語に対する気持ちの相関 (Study I)】

	英語が好き	英語が得意
3年	.47	.30
4年	.33	.60
5年	.32	.34

【Table 2 英語指示を好むことと英語に対する気持ちの相関 (Study II)】

	英語が好き	英語が得意
3年	.38	.41
4年	.40	.38
5年	.45	.48

4 研究の考察

(1) 指示の理解について

3・4年生では、英語指示よりも日本語指示の方が理解できているという結果が出た。しかし、英語指示の理解度も十分高い。活動パターンでは、どの学年でも日本語で指示をした方が、その後すぐに活動に取り組んでいることが分かった。

以上のことにより、外国語活動の入門期である中学年では、英語指示と合わせて日本語での指示も用いることで、児童の英語での発話を促進できる可能性がある。一方で、高学年では、十分なインプットの蓄積があることから、英語だ

けでも授業を進めることができる可能性が示唆された。

(2) 教授言語の好みについて

教授言語の好みについては、この研究では、小学生は英語指示を好むのか、日本語指示を好むのかということを明らかにする結果は得られなかった。Study I から Study II で、どの学年でもクラス替えがあり、担任も変わっている。このことから、児童やクラスの実態が教授言語の好みに影響を与えている可能性が考えられる。

(3) 教授言語の好みと英語に対する意識について

英語に対して前向きな気持ち (好き・得意) をもっていることと英語指示を好むことの間には正の相関関係が見られた。中学校・高校では「英語の授業は英語で」行われることとなる。そのためにも、小学校では英語に対して前向きな気持ちを育てていくことが大切であることが、今回の結果から分かった。小学校段階で英語に対して前向きな気持ちを育てることで、中学校・高校での「英語の授業は英語で」の素地を育てることができると思う。

5 今後の展望

本研究では、Study I と Study II で共通している結果、違っている結果の両方が得られた。そのため、本研究を土台として、様々な学校で同じような研究をし、どのような場面でどのような教授言語を用いることがふさわしいのかを明らかにしていく必要がある。